

Title	西本辰之助先生を憶う
Sub Title	
Author	前原, 光雄(Maebara, Mitsuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1975
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.48, No.9 (1975. 9) ,p.105- 106
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19750915-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西本辰之助先生を憶う

前原光雄

西本先生が逝かれたことを手塚教授の御厚意により電話連絡をうけて知った。享年九十一歳とのことである。御郷里和歌山に隠棲せられて以来、お目にかゝることも稀であり、最後にお目にかゝつたのは第二研究室（現在の国際センター）であつた。その時のお話では、先生が叙勲せられその式に出席された帰りに、途中で植木の市を見て、それから三田へ来られたように記憶している。これで私が教えをうけた先生は全部他界せられたことになる。私達の学生時代に講義をして居られた先生としては高橋誠一郎先生があるが、私は法律科であつたので、高橋先生の講義を拝聴する機会はなかつた。

想えば私は、西本先生に大変お世話になつた。学恩という点からは板倉卓造先生の次に恩を感じるのには西本先生である。先生に御迷惑をかけた最大のものとして、今でも申し訳なく思うのは、私が昭和三年秋に神田の清水書店から出版したロスコウ・パウソド著の Law and Morals を訳出して書名は「法律と道

徳」とし、これが校閲を西本先生にお願した。この頃私はまだ専攻が確定していなかつたので、このような書物を訳したわけである。校閲ということが、どんなに面倒くさいことであるか、世間知らずの私が先生にどんなに御迷惑なことをお願したか、今考えても汗顔の至りである。一面からみれば、こんなことを御願いできるような親しみをもつことのできるお人柄であつたということが出来る。先生には助手時代から度々接触する機会があつた。それは大正十二年に創刊せられた「法学研究」の編集は西本先生がやられ、その編集助手のような仕事を藤岸治三助手がやられ、その手伝を私がやつていたので、その面からも先生に接するチャンスは比較的多かつた。こういういきさつからと思うが、私も相当期間法学研究の編集に関係していた。それはさておき、憶い出、その他私の感想を述べてみたい。

西本先生は人格的に立派な人であつた。秋霜烈日というようなきびしさは感じられないが、円満な人格者ということが出来る。温厚なお人柄であるということには何人も異論はないと思うが、単なるお人よしではない。筋道はちゃんと通されて、主張すべきことは断固主張される。非常に健康に恵まれ、先生を知つて五〇年以上になるが、肥満体になられることもないし、瘦躯鶴の如しというようなこともなし、いつも同じような姿を拝見している。健康体の証拠であらう。九十歳を超える寿命は

超健康でなければ保てないことである。

先生の趣味は、五月と万年青の栽培である。この外の趣味、たとえば囲碁、将棋等は先生がやつていられるのを見たことはない。五月頃に五反田のお宅にお邪魔すると、何百鉢というサツキが美しい花を咲かせている、サツキは接木と差木で、いろいろ変つた品種を創り、優れた技術をもつて居られたように思う。オモトも永い間栽培して居られ、いゝ品種のものは一芽何万円とか何千円という値段があるそうである。まだ物価のあまり高くない頃に、一芽何万円という話を伺つた。その当時のオモトの一芽の方が、私の給料より高いので驚いたものである。このような高いオモトを栽培され、またサツキの新種を創り出されたことも度々であるが、オモトとサツキで先生が産を成された話は聞かない。やつぱり、これは先生の趣味に過ぎないわけである。

われわれの親るところでは、先生は家庭的には恵まれないように思える。奥様が痛でなくなられたのは、相当のお年であつたので曰むを得ないとしても、令息お二人とも頭脳明哲で、優秀な方であつたが、それぞれ、病氣になられ、結局、病氣療養中の御令息たちも、先生より先に他界せられる結果になり、本当にお気の毒であつた。さらに加えて、西山さんに嫁がれたお嬢さんお一人も最近お亡くなりになり、お子様たちはすべて先

生より先に世を去られた。このようなわけで、一般的な感覚からは、家庭的には不幸であつたように想像されるけれども、先生御自身のお気持はもちろん、知る由もない。

先生は身なりをあまり気にせられん方である。私は先生がおしやれをしていらつしやると感じたことは一度もない、おしやれと言うと語弊があるかも知れないが、服装を気にするということで、例えば、板倉先生や及川先生は服装について相当注意を払つていられたことが私には感じられたが、西本先生は非礼にわたらない程度の注意を払つていられるだけで、それ以上に注意せられているように思えない。これは昔話であつて、西本先生から直接伺つたのであるが、明治の四十何年かにドイツに留学せられる時に、汽車でシベリヤ經由で行かれた。その時の先生の服装は背広の上にオーバーを着ず、和服の時に着る二重廻しを着て行つたとのことで、ロシアを始め汽車の中で、不思議なものを着ているので、じろ／＼見られたとのことであつた。こういうことから観ても、服装はあまり気にせられなかつたことがわかる。

私は先生が不平を言つたり、他人を非難したりしているのを聞いたことがない。これは仲々できないことである。従容難に殉ずるといつた先生の姿は立派である。